

第2期第1回インクルーシブ教育（支援児包容教育）推進委員会 議事録

□開催日時：平成27年10月2日（金）14：30～17：30

□開催場所：駅北庁舎 4階 災害対策本部室

□出席者（敬称略）

- ・委員：水崎誠 宇野宏幸 中野正大 安藤克己
水野浩庫 坂田俊広 小山正子 加知昌彦 保母朋子 中宿清美
大嶋美子 水野育美 若林恭子
- ・事務局：渡辺哲郎教育長 丸山近副教育長 永治友見教育次長 田中慎一郎
市原浩代 安井宏治 早瀬かおり 藤井淳司 柳原伸哉

1 あいさつ

教育長

学校でのユニバーサルデザインの授業づくり、個別の支援の充実などインクルーシブ教育推進たじみプランを着実に推進している。来年に向けてさらにご意見をいただき、改善していきたい。

2 検討内容

（1）進捗状況について

事務局

（プランの進捗状況について報告）

① 居住地校交流の取組の推進

委員

事前に担当者が連携することで、担任に任せるだけでなく、より確かな交流となった。小学部への入学者は直接交流を全員が希望している。

委員長

学校体制で対応すべきことなのでたいへんよい連絡会である。

委員

保護者の負担もあるし、双方の担任の負担もあるのでそこも考慮して進めるべきである。

委員長

小学校の低学年から続けることが大切で、形骸化しないように中身の充実を図りたい。

委員

双方が学べるようにすることがよい交流である。

委員

歓迎されることはうれしいが、お客さんのように接するのではなく、互いが楽しめるものであるとよい。

委員長

双方の交流のねらいを明確にしていくこと。今後は、交流の回数よりも内容を大切にしたい。

② 園と学校における外部機関との連携の強化

委員長

巡回相談が充実してきているため、他の外部機関の活用が少なくなっている。

委員

巡回相談がきっかけになり特別支援学校を視野に入れている子どもについてのつなぎの支援もできている。

委員

どんなときにどんな外部機関を活用するのかを特別支援教育コーディネーターに十分に伝えていく。

委員長

外部機関の活用例を具体的に示すと分かりやすい。

副委員長

巡回相談と外部機関の活用との棲み分けはどうなっているのか。

事務局

巡回相談では就学相談を主に対応しているが、それだけでなく支援について迷っている事案についても相談を受けている。

委員

巡回相談に上がってくるケースによっては、医療とつなげたり、特別支援学校とつなげたりするなどができ、その後の一貫した支援につながっている。

副委員長

各学校の主体性を育てていくためには巡回相談が有効であるので、さらに充実を望む。

③ 就学先決定の仕組みの見直し

委員

巡回相談は、他機関との情報交流ができ、いろいろな角度からの意見も聞けて、参加した者がたいへん学べる。

委員

保護者の要望で巡回相談はしてもらえるのか。

事務局

保護者の要望は園や学校を通して伝わってくる。その上で巡回相談をして、保護者には園や学校からフィードバックをしている。

委員

園も巡回相談をしてもらえるため、今やっている園での支援がよいのかどうかの確認もできるのでたいへんよい。

委員長

もう少し校内で語る子どもの精選ができるとよい。また、巡回のメンバーを増やしていけると負担が少なくなる。そのため、中学校区ごとの個別の教育支援計画作成委員会を拡大していけるとよい。

委員

中学校区ごとの個別の教育支援計画作成委員会に巡回相談が加わるとさらに充実する。

委員長

そうした動きを市教委が積極的に進めてほしい。さらに、保護者の意見聴取が学校にゆだねられているが、もっと他の場が必要。

委員

中学3年生の進路まで見据えたケース会議は保護者にとってはとてもありがたいものであり、いろいろな校区で実施してほしい。

④ ユニバーサルデザインの授業づくりの推進

委員

通級指導教室を使っている児童にとってはとてもありがたい支援である。教室の全面がすっきりしたり、視覚的な支援があったりするなど。

委員長

このことを推進することで誰にとって有効な支援であるのかを常に意識して進めていくことが大切である。ただやればよいというものではない。ぜひ、若手の教職員の研修会で活用してほしい。

委員

分かっているつもりでも、こうした冊子になってまとまることで、再認識することができる。また、児童生徒が授業評価をすることもユニバーサルデザインの授業づくりに有効に働くのではないか。

副委員長

これだけの事例をよく集めている。これを充実発展させるために、これを教員が活用している様々な教科に転化していき、それを交流していく。1つの視点に対して多くのバリエーションをもたせていく。

委員

障がいのある子どもだけでなく、みんなにとっていいことである。多すぎる教室の掲示は落ち着かない。環境が変われば、すごくよくなる子どももいる。教室はできるだけシンプルがよい。また、どうして子どもにとってこのことが困難なのかを考えることが大切である。

委員長

子どもの困り感を把握しその上でユニバーサルデザインの授業づくりをして、検証をするという進め方が望ましい。

副委員長

さらに、学びの多様性を認めることも大切である。そうした実践も事例集に含めていくことで、先生方の意識改革となる。

委員長

例えば、読み書きの障がいがある子どもは、タブレット端末を活用するなど、学びの多様性を認めていくことは必要である。また、そうしたことを学級の仲間が認めていけるようにすることも重要である。

⑤ 早期からの教育相談・支援の充実

委員

4歳児をもつ保護者が先を見通して学びの場を見学することができるのはたいへんよい。

委員

保護者が質問しやすかったという声も聞こえた。今年度のようにあくまで保護者が主体となる見学会にしていくことに賛成である。

委員

私立の園からはあまり学校見学が勧められていないと聞いている。

委員長

最近では、私立の園からも巡回相談への依頼が増えている。早期からの情報提供について保健センターの健診からも行ってほしい。

(2) 発達障がいの可能性のある児童生徒に対する早期支援研究事業

事務局

(進捗状況の報告 9)

委員

長期休業中に家庭にタブレット端末を貸し出すのは保護者からの希望なのか。

委員

保護者の意向を聞いた上で校内のケース会議で適切かどうかを検討した上で貸し出しをした。そうすることで、有効に活用でき子どもへのよい支援となる。

3 次回の予定

事務局

2月を予定している。